

八木健に学ぶ滑稽俳句 7

高橋 素子

炎天の野球部用の薬箱

八木健

赤とんぼ二塁にとまりフルベース 八木健

この十一月三日、楽天が巨人を四対三で破り、日本シリーズで優勝を飾った。球団楽天創設以来の、また星野監督にとっても初の日本一である。

「相手が王者ジャイアンツだから…、こんなに嬉しいことはない。最後までハラハラ気が休まらなかった。何が起こるか分からん…、人生は！」終始、泣き笑いのような顔をして、いつもの星野節よろしく、インタビューに答える監督。

八月二十一日（日本時間二十二日）には、米大リーグ・ヤンキースのイチローが日米通算四〇〇〇安打を達成した。いつものように表情を変えることなく一塁に到達したイチローも、野球を中断してダグアウトを飛び出して来たヤンキースの仲間たちの祝福に、半ば泣きそうな感激の表情で嬉しそうに応えた。その時のインタビューのイチローの言葉が味わい深い！「四〇〇〇本の安打を打つには、八〇〇〇回以上の悔しい思いをして来ているんです。その悔しい思いに自分なりに向き合って来たという事実…その事を誇りたい」。日頃から、心にも体にも備えがあるイチロー故の歴史的偉業である。

掲出の師の句は、炎天下、草野球のベンチの上の小さな薬箱の風景を詠んでいる。誰の目にとまる事もなく、野球の得点の取り合いや声援・野次にも関係なく、忘れられたような薬箱の存在に師は目をとめている。その薬箱を描く事によって、そこに描かれていない子どもたちの歓声やらを想像させる味わい深い句である。

二句目は、一・三塁には走者がいるが、二塁はあいている。緊迫した試合の中で、赤とんぼが二塁のベースに止まった。その緊張の瞬間、赤とんぼを走者と勘違いしたような錯覚に誰もが陥って、フルベースのように感じた師は詠んでいる。機智的滑稽俳句とも思える師の佳句である。

今少し、師の滑稽句を見てみよう。

炎天に穴を開（あ）けたるホームラン 八木健

金属バットの空振り三振風光る 八木健

ホームランの句は、炎天に穴があくわけではないが、この非科学的表現が詩である。炎天に球が吸い込まれて行く様子を、天に穴をあけたという誰もしたことがない言葉で表現している。自分の打った球や最良の選手のホームランなら、尚更そんな気持ちになるに違いない。可笑しい俳句は、感受性豊かな心で感じたままを書くことによって生まれるという師の実例句である。

掲出の師の前三句は、滑稽俳句の殆どがそうである様に、「一物仕立て」である。金属バットの句は、滑稽句には珍しく「取り合わせ」の句であるが、地上では離れ離れに見える二つの言葉も、地下水脈で「瞬間の煌めき」という繋がりがある。

今回も古来の名句と師・八木健の句の比較により、滑稽句の学習を深めていきたい。

熱燗に泣きをる上戸ほっておけ 高浜虚子

熱燗のおかわり論客に噛みつかれ 八木健

虚子の句は、一座の「上戸」たちが熱燗を楽しんでいる。そのなかの一人が少しのお酒にすぐ酔っぱらって、何かにつけて泣く。所謂「泣き上戸」に変身した。泣き上戸の愚痴など聞いてはいられない。そんな奴はほっておけ、ということになる。

八木健の句は、倒置法である。「論客に嘔み付かれ熱燗のおかわり」とすると意味がよくわかる。楽しい酒の席で論客に嘔み付かれ、酒の勢いを借りて反撃に出る。だから「おかわり」が必要なのである。

「熱燗や聞き役のある泣き上戸」とか「熱燗や論客同士酌みかはす」では面白くも何ともなくつまらん。だから、「ほっておけ」であり「嘔み付く」のだと、師匠は語る。両者共に、お酒の席での面白い光景を上手い滑稽句に形作っている。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡子規

泥棒の目つきで見上げ熟し柿

八木健

誰もが知っている子規の有名な柿の句である。初案は、「柿喰うて居れば鐘鳴る法隆寺」あったが、これでは単に事実を述べているだけで、句法が弱くなると、子規自身も「病床六尺」で述べている。この二か月程前に、漱石が「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」とそっくりな句を詠んでいるが、句の師である子規が漱石の句を大きく発展させたとみるべきであろうか。

師・八木健の句は、心に映じたことを正直に句に記録すれば、可笑しい俳句になるという見本のような句である。美味しそうな熟柿を見上げ「ひとつほしいなあ」と思うのは誰しも同じであろう。その時の自分の目つきは柿泥棒の目つきなのだと、師は詠んでいる。そんなことを他人に知らせるのは恥ずかしいことだが、自己風刺して自分の心を描写してこそ本物の記録がとれ、可笑しい俳句になると、師匠は述べている。